

2020年（令和二年）

7月27日（月曜日）

毎週（金）14:00発行

発行所 （一財）日本エネルギー経済研究所
石油情報センター電話（03）3534-7411（代）
FAX（03）3534-7422〒104-8581 東京都中央区勝どき1-13-1イヌビル・カドキ11階
ホームページ <https://oil-info.leej.or.jp>

■ 概況

7/9~7/15のNYMEX・WTI先物市場は、39.62~41.20ドルの範囲で推移した。

7月16日は、前日のOPECプラス閣僚合同監視員会で予定通り、現行970万b/dの協調減産を8月以降770万b/dに縮減することを確認したことで、前日夕刻から利益確定売りが相次ぎ、3営業日ぶりに反落した8月限終値は前日比0.45ドル安の40.75ドル。

週末17日は、前日来のOPECプラスの8月以降の減産縮小の報道に加え、米国の新型コロナ感染再拡大でこの日感染者数が7.5万人を超え史上最大となったことから、供給過剰感が再浮上、続落した。また、この日ペーカーヒューズ発表の米国稼働石油掘削機は180基と前週比1基減、18週連続の減少（503基減）となった。8月限の終値は前日比0.16ドル安の40.59ドル。

週明け20日は、コロナワクチンの開発の進展、ハイテク株を中心とする米国株式の上昇、ユーロ高・ドル安を背景とする原油先物の割安感等を背景に、反発した。ただ、新型コロナの感染再拡大に対する警戒感も強く、上値は重かった。8月限終値は前週末比0.22ドル高の40.81ドル。

21日は、EU首脳会議でのコロナ危機からの経済再建基金（7500億ユーロ規模）の設置、米国での追加経済対策の協議開始などを好感し、大幅続伸し約4か月半ぶりの高値を記録した。翌日発表予定の米国の原油・石油製品在庫の取り崩し観測もこれを後押しした。取引の納会日を迎えた8月限終値は前日比1.15ドル高の41.96ドル。

22日は、この日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の週報で、前週末の原油在庫が前週末比490万バレル増と市場

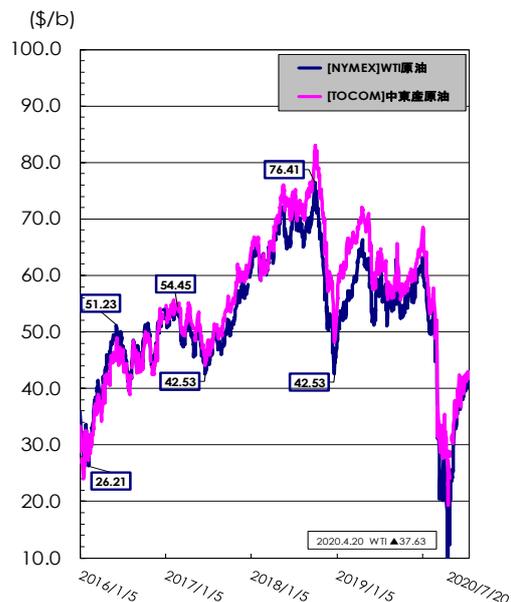
予に反して積み増しとなり、中間留分在庫も1982年以来最高の1億7790万バレルとなったこと、また、米中関係の一層の悪化が懸念されることからわずかに反落した。この日から、中心限月となった9月限の終値は前日比0.02ドル安の41.90ドル。

アジアの指標原油である中東産パイ原油/東京市場（9月渡し）は7月9日~15日の間42.10~43.60ドルの範囲で推移した。7月16日43.90ドル、17日43.60ドル、20日42.50ドル、21日43.30ドル、22日44.30ドルと推移した。

為替は7月9日~15日の間106.84~107.31円の範囲で推移した。7月16日106.99円、17日107.28円、20日107.52円、21日107.25円、22日106.89円で推移した。

そのような中で、7月20日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.4円の値上がり、軽油も同0.5円の値上がり、灯油は4円の値上がり（18%ベース）だった。ガソリンは10週連続の値上がり、軽油も10週連続の値上がり、灯油は9週連続の値上がりだった。この週（7月第3週）の原油コストはわずかに値上がりしたが、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに全社据え置きとなった。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/12 ~ 7/18	2,344 ▲40	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	59.9 ▲1.1	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	7/18	13,349 ▲237	▲ -
価格	中東産原油 (TOCOM) (\$/bbl)	7/20	41.70 ▼0.86	▼ -19.8
	WTI原油 (NYMEX) (\$/bbl)	7/20	40.81 ▲0.71	▼ -15.4
	原油CIF単価 (\$/bbl)	6月中旬	23.77 ▲0.28	▼ -49.31
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	16,168 ▲277	▼ -33,971
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	108.17 ▼0.58	▲ 0.90
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/20	108.52 ▼0.68	▲ 0.46



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/12 ~ 7/18	818 ▼ -13	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	736 ▼ -47	▼ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	▼ -	
	在庫	7/18	1,744 ▲ 82	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/14 ~ 7/20	41.7 ▼ -0.1	▼ -18.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/14 ~ 7/20	40.0 ▼ -0.2	▼ -15.7
		(TOCOM/中部)	7/20	41.2 ▲ 0.7	▼ -15.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/20	132.2 ▲ 0.4	▼ -13.6	

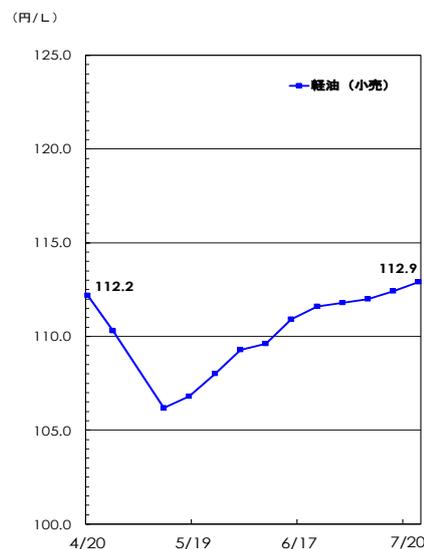
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

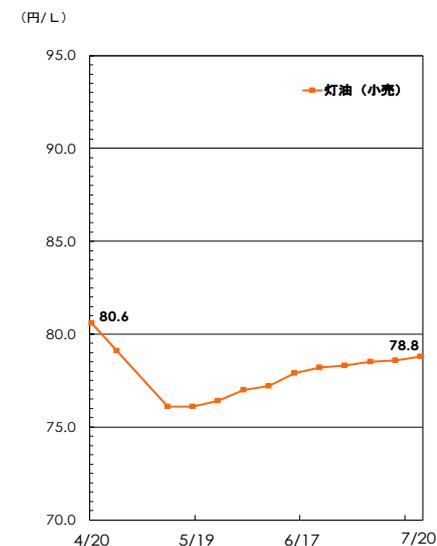
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/12 ~ 7/18	655 ▲ 59	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	557 ▼ -2	▼ -	
	輸出	"	52 ▲ 47	▼ -	
	在庫	7/18	1,633 ▲ 46	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/14 ~ 7/20	43.5 ▼ -0.1	▼ -19.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/14 ~ 7/20	46.9 ➡ 0.0	▼ -16.3
		(TOCOM/中部)	7/20	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/20	112.9 ▲ 0.5	▼ -13.9	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/12 ~ 7/18	143 ▼ -19	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	74 ▼ -24	▼ -	
	輸出	"	0 ▼ -18	➡ -	
	在庫	7/18	1,856 ▲ 69	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/14 ~ 7/20	43.3 ➡ 0.0	▼ -18.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/14 ~ 7/20	41.4 ▲ 0.6	▼ -16.8
		(TOCOM/中部)	7/20	43.0 ➡ 0.0	▼ -16.3
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/20	78.8 ▲ 0.2	▼ -12.4	



■ 関連情報

1 海外/原油

7月22日のNYMEX市場WTI先物原油は、この日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の週報で、前週末の原油在庫は前週末比490万バレル増と市場予想(210万バレル減)に反して積み増しとなり、航空需要の低迷を反映し中間留分在庫も同110万バレル増と1982年以来最高の1億7790万バレルとなったこと、また、米国政府が知的所有権侵害でヒューストンの中国総領事館閉鎖を命じるなど米中関係の一層の悪化が懸念されることから反落した。ただ、売り一巡後は買戻しも見られ、わずかな下落で止まった。この日から、中心限月となった9月限の終値は前日比0.02ドル安の

41.90ドル、10月限の終値は同0.02ドル安の42.04ドル。

EIAによると、7月20日時点のガソリンの小売価格は、前週比0.9セント値下がりの1ガロン2.186ドル(62.6円/ℓ)、ディーゼルは同0.5セント値下がりの2.433ドル(69.7円/ℓ)になった。ガソリンは12週ぶりの値下がり、ディーゼルは7ぶりの値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2020年7月12日~7月18日に休止したトッパー能力は70.1万バレル/日で、前週に対して0.0万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。

原油処理量は234.4万klと、前週に比べ4.0万kl増加。前年に対しては102.9万klの減少。トッパー稼働率は59.9%と前週に対して1.1ポイントの増加、前年に対しては26.2ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてガソリン、灯油、A重油が減産となり、その他の油種で増産となった。ガソリン/1.6%減、ジェット/18.7%増、灯油/11.9%減、軽油/9.9%増、A重油/3.4%減、C重油/8.9%増。今週のC重油の輸入は1.5万kl(前週比0.5万kl増)。軽油の輸出は5.2万kl(前週比4.7万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でジェット、C重油が増加となり、その他の油種で増加となった。前年比ではジェットが増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は73.6万kl(対前週5.9%減)と2週連続で減少となり、48週連続で100万klを下回った。ジェット14.4万kl(対前週495.6%増)、灯油7.4万kl(対前週25.1%減)、軽油55.7万kl(対前週0.5%減)、A重油13.4万kl(対前週24.9%減)、C重油14.7万

kl(対前週9.2%増)。

(単位:千kl)

	今週 (7/12 ~ 7/18)	前週 (7/5 ~ 7/11)	前週比
ガソリン	736	783	▼ -47 (-6%)
ジェット燃料	144	24	▲ 120 (500%)
灯油	74	98	▼ -24 (-24%)
軽油	557	559	▼ -2 (-0%)
A重油	134	179	▼ -45 (-25%)
C重油	147	134	▲ 13 (10%)
合計	1,792	1,777	▲ 15 (1%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月18日時点の在庫は、ジェットが取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。

ガソリンは174.4万kl、前週差8.2万kl増。前年に対しては24.4万kl多い。

灯油は185.6万kl、前週差6.9万kl増。前年に対しては22.1万kl多い。

軽油は163.3万kl、前週差4.6万kl増。前年に対しては14.9万kl多い。

A重油は76.4万kl、前週差0.7万kl増。前年に対しては6.3万kl多い。

C重油は196.3万kl、前週差4.0万kl増。前年に対しては0.2万kl多い。

(単位:千kl)

	今週 (7/18)	前週 (7/11)	前週比
ガソリン	1,744	1,662	▲ 82 (5%)
ジェット燃料	713	794	▼ -81 (-10%)
灯油	1,856	1,787	▲ 69 (4%)
軽油	1,633	1,587	▲ 46 (3%)
A重油	764	757	▲ 7 (1%)
C重油	1,963	1,923	▲ 40 (2%)
合計	8,673	8,510	▲ 163 (1.9%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月14日～20日の原油価格は、前週比でわずかに値上がりし、為替レートは横ばいで、原油コストはわずかに値上がりしたものと見られる。

これを受けて、次週の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、全社、据え置きとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

7月14日～20日の製品スポット市況は、7月7日～13日平均と比べ、各油種・各取引で、小幅値下がり、横ばい、小幅値上がり、と、狭い範囲で異なる動きを示した。

直近(7/14～7/20)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリンは0.1円の値下がり、灯油は横ばい、軽油は0.1円の値下がりだった。直近(7/14～7/20)において、ガソリンは95円台で値下がり、灯油は43円台で値下がり、軽油も43円台で値下がり、で推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、同期間、前週比で、ガソリンは0.2円の値上がり、灯油は0.1円の値上がり、軽油は0.2円の値下がりだった。海上スポット価格は、同期間に、ガソリンは96円台で横ばい、灯油は39円台で一時値上がり後値下がり、軽油は45円台で値下がり後横ばいで推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは0.2円の値下がり、灯油は0.6円の値上がり、軽油は横ばいだった。先物価格は、同期間に、ガソリンは93～94円台で一時値上がり後大きく値下がり、灯油41円台で出入り後値上がり、軽油46～47円台で値上がり後やや値下がり、で推移した。

(RIM) (単位: 円/%)

(陸上ローリー4地区平均)	今週 (7/14～7/20)	前週 (7/7～7/13)	前週比
レギュラー	41.7	41.8	▼ -0.1
灯油	43.3	43.3	→ 0.0
軽油	43.5	43.6	▼ -0.1

(TOCOM) (単位: 円/%)

(期近物/終値) [平均]	今週 (7/14～7/20)	前週 (7/7～7/13)	前週比
レギュラー	40.0	40.2	▼ -0.2
灯油	41.4	40.8	▲ 0.6
軽油	46.9	46.9	→ 0.0

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/14～7/20実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -0.1	▼ -0.2	▼ -0.1
灯油	→ 0.0	▲ 0.6	▲ 0.3
軽油	▼ -0.1	→ 0.0	▼ -0.1
A重油	▲ 0.1		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

7月20日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.4円高の132.2円、軽油も同0.5円高の112.9円、灯油は18%ベースで同4円高の78.8円(1%ベースでは同0.2円高の78.8円)。ガソリンは10週連続の値上がり、軽油も10週連続の値上がり、灯油は9週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは28道府県、横ばいは5県、値下がり14都県となった。全国最安値は徳島県の123.5円(同0.9円高)、その次に安いのが岡山県の124.4円(同0.6円安)、最高値は長崎県の142.2円(同1.2円高)。最も値上がりしたのは、同2.9円高の高知県(140.0円)、横ばいは福井県・富山県・島根県・山口県・宮城県

の群馬県(136.3円)だった。

先週の原油コストはわずかに値上がりし、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油とも、全社据え置きとなった。今週は、原油価格はわずかに値上がりし、為替レートも横ばいで、原油コストはわずかに値上がりした。次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社、据え置きとなった。次回調査時(7月27日)のガソリン価格はこれまでの卸価格の転嫁が進むことから、小売価格は小幅な値上がりが見込まれる。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (7/20)	前週 (7/13)	前週比	直近高値
レギュラー	132.2	131.8	▲ 0.4	08/8/4 185.1
灯油	78.8	78.6	▲ 0.2	08/8/11 132.1
軽油	112.9	112.4	▲ 0.5	08/8/4 167.4

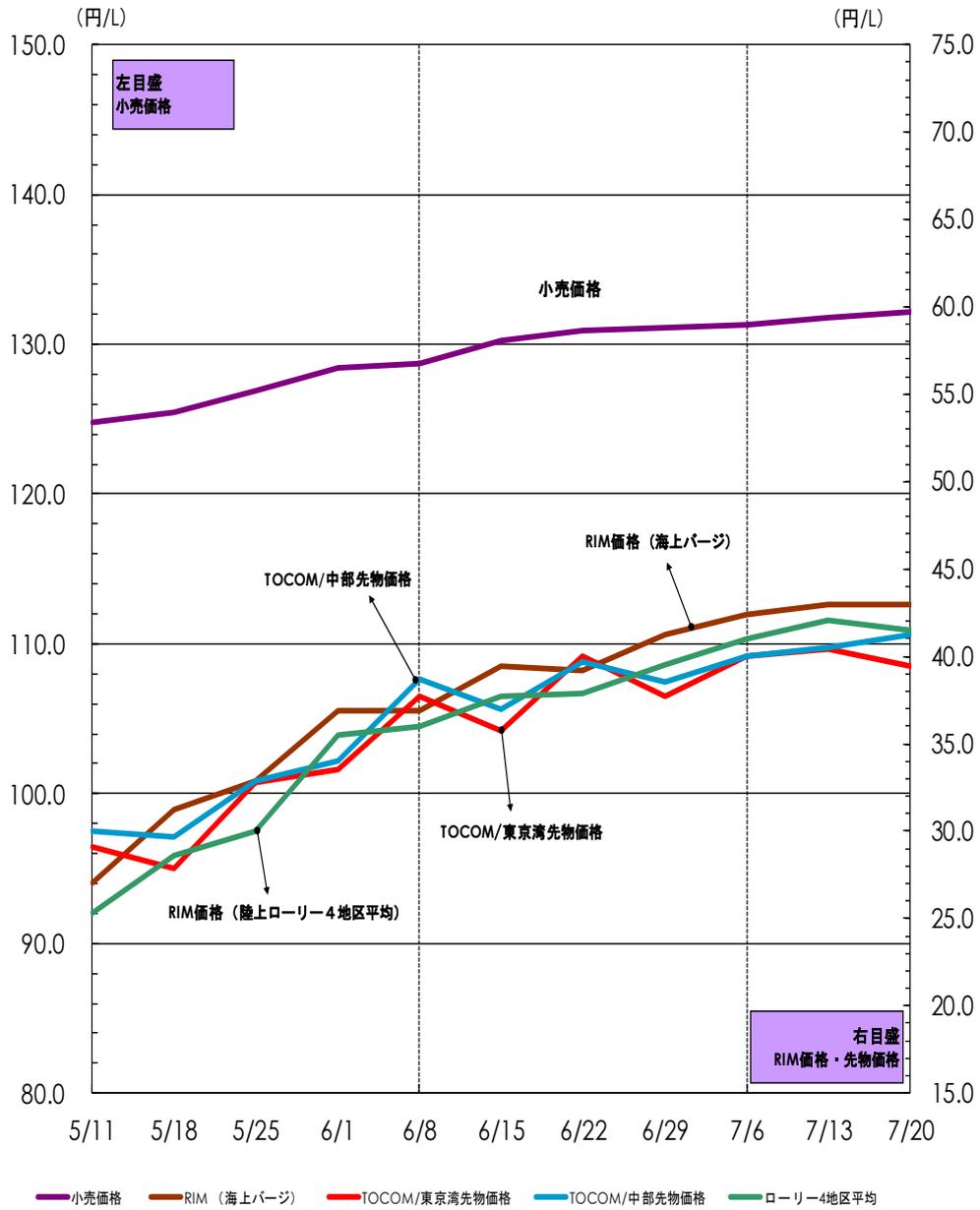
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2020/5/11 ~ 2020/7/20)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2020第6号)の公表は、7/31(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和元年9月末現在)は、12月25日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。